

封印された初期三島由紀夫文学をめぐって

—— 幻想小説「檜扇」における〈自己表現〉 ——

武内 佳代

はじめに

これまで報告者は、戦後の三島文学における〈戦後日本〉表象やレズビアン表象など、おもに、歴史、文化、ジェンダーといった互いに交差する問題系を視座として、その文学表象の可能性についての研究を重ねてきた。だが今回は、従来あまり注目されてこなかった戦中の三島の文学作品を研究対象として、文学表象のみならず、三島という作家主体に接近をはかることで、改めて、戦後へとつながる戦前の初期三島文学の様相を分析検討し、研究の視野を広げようと考えた。そのため、本報告が、きわめて導入的、準備的な報告であることを予めお断りする。

さて、1925（大正14）年1月生まれの作家三島は、昭和の元号をそのまま年齢に換算できる。その意味では、文字どおり昭和とともに生きた作家といえることができよう。とりわけ太平洋戦争終結の1945（昭和20）年から、1970（昭和45）年に東京都市ヶ谷の陸上自衛隊東部方面総監部にて45歳で割腹自殺を遂げるまで、戦後日本文学界の寵児として活躍したことで名高い。だが、早熟で知られる三島は、まだ十代だった戦中においても、その創作活動を活発に行っていたのだ。そうした戦中の創作のなかで、ここで取り上げるのは、三島の生前には公表されなかった幻の短編小説「檜扇」である。1996（平成8）年9月に、山梨県山中湖村主催の展覧会ではじめて原稿の一部が展示され、三島の没後30年にあたる2000（平成13）年になって、雑誌「新潮」の特集号に、活字で全文掲載された。現在は、完成された一つの短編小説として『決定版三島由紀夫全集』第16巻（新潮社、2002年3月）に収録されている。「檜扇」は、その原稿末尾の記載から、1943（昭和18）年12月18日に起筆され、1944（昭和19）年1月5日に擱筆されたことがわかっているが、原稿48枚目の「昭和十八年十二月卅一日午後十一時五十九分」という記入からは、当時まだ18歳だった三島が、1943年の年末から翌年の新年にかけて、深夜懸命に創作した息づかいが伝わってくる。

では、「檜扇」のあらすじを、簡単に確認しておく。

北欧の小都市の領主フォン・ゴッフエルシュタル男爵は、長くそこを不在にしていたが、ついに帰来す



報告者の発表風景

るとの噂が立つ。その小都市に滞在中の日本人旅行者「私」が「殿村さん」と名前を呼ばれ、見るとそれは男爵だった。男爵は、かつて欧州に着任した日本の外交官の奥方、花守伯爵夫人を愛したいきさつを「私」に話す。そして、花守夫人との香しい生活も束の間、ある日、男爵が睡眠薬か何かのせいで、二、三日眠ってしまったとき、花守夫人は死んで棺の中の人となっていたのだという。しかし男爵は、彼女がじつは生きていて、日本に帰国したものと信じており、彼女の大切な檜扇を、日本にいる花守夫人に渡してほしいと「私」に頼む。その後ベルリンで、留学中の友人から当の男爵家が百年以上前に絶えていることを聞かされる。だが「私」は、花守夫人が日本にいることを固く信じ、早く帰国しようと思う。

1. 問題設定

本作は、これまで研究対象として取り上げられたことはなく、「幻想的なストーリー」¹「世にも冷艶な恋物語」²、といった具合に、いまだ印象的な言及しかない。ところで、杉山欣也氏は最近の論文のなかで、「三島の隠蔽した作品が日の目を見た今日、「三島の語らなかつた三島」の考察が必要である。」³として、これまで作家による自己言及に頼りがちだった三島文学研究の再構築を促している。これを受けて、本報告は、以下、三島によって封印され、公には語られることのない「檜扇」について改めて検討することで、三島

によって公表された作品群や自作解説、および、それらに依拠した従来の三島文学研究が再生産してきた初期三島文学像の一部を、新たに書き換えてみようと考え。では、さらに具体的な問題設定を示そう。

1943（昭和13）年12月30日、「檜扇」執筆中の三島は、文芸雑誌「文芸文化」を編集していた学習院中等科時代の恩師・清水文雄に宛てた書簡⁴のなかで、「檜扇」を「『文芸文化』の空気とは離れた」「怪奇小説」「幻想小説」と説明し、そうした本作が「文芸文化」に掲載されるかどうか危ぶんでいる。さらに、その約三ヶ月後の清水宛書簡⁵では、「文芸文化も終刊号御出しの由。（中略）原稿を、との仰せ、ありがたく、錦とはまららずとも手織木綿位みの処で終刊号を飾らせていたゞくのがうれしうございますが、今月中にもし書けませぬ場合は、お言葉に甘え、「檜扇」を少々手を入れるなりした上で御のせいたゞかうかと思つてをります。」という具合に、新作が出来上がらない場合は、修正してでも「檜扇」を「文芸文化」終刊号に掲載したい旨を伝えている。実際には、「檜扇」は掲載されずに封印され、別の作品が掲載されることになるのだが、それにしても、「文芸文化」にそぐわぬ「檜扇」を、わざわざその終刊号に掲載したいという、この一種奇妙な作家の願望は、一体どこから生まれたものだろうか。そして何を語るだろうか。これが本報告の問題設定である。

では、この問いを検討するにあたって、まずは三島の初期の創作活動と雑誌「文芸文化」との関わりを簡単に述べておく。

2. 日本浪漫派と三島文学 —— その出会いと訣別に関して

戦後の三島は、自身の小説家活動を振り返って、「戦時中の日本浪漫派とのつながり」を、その出発点と位置づけている⁶。これは、具体的には日本浪漫派系の雑誌「文芸文化」とのつながりをさしている。

日本浪漫派とは、文芸雑誌「日本浪漫派」（1935～1938年）で活躍した作家を中心とした文芸思潮をさす。初期日本浪漫派は、西欧崇拜の反省、詩的精神の高揚、日本の古典復興などを高踏的に表現することを特徴としていたが、やがて日本精神への回帰という本質主義的傾向を強め、戦時体制の拡大とともに、国学の復興などの国粋主義的な政治的活動と繋がっていったとされる⁷。こうした日本浪漫派の流れをくむのが「文芸文化」なのだが、初期三島文学とそれとの関わりは深い。

「文芸文化」は、1938（昭和13）年から1944（昭和

19）年に渡って刊行された、日本浪漫派を代表する国文学研究・文芸雑誌である。日本浪漫派の延長線上にありながらも、とくに日本古典の美と伝統を顕彰しようとする、国学的な復古主義の姿勢にその特色があった。三島は、学習院中等科の国語の教員で、当時「文芸文化」の編集に携わっていた清水文雄の推薦で、1941（昭和16）年、16歳のときに、初めて「三島由紀夫」というペンネームで短編小説「花ざかりの森」をこの雑誌に掲載する。雑誌編集人たちからは、「われわれ自身の年少者」「悠久な日本の歴史の請し子」などと絶賛、歓迎され、以来、三島は終刊まで小説・詩・評論などを発表し、同人たちから強い影響を受ける⁸。

さきに触れたように、「文芸文化」は、とりわけ「日本古典の美と伝統」を讃美することに特化された内容だったため、いわゆる国学的な復古主義あるいは国粋主義的な姿勢を強くもっていた。したがって、当初は政治的意図をもたない純粋な国文学研究・文芸活動の雑誌だったにせよ、戦時下のナショナリズムの高揚と容易に呼応する危うさをはらんでいたといえる。当然、三島もそうした戦況への文学的な呼応に巻き込まれたと考えられる。そして、そうした体験が、1965（昭和40）年ごろまでに表面化しはじめる三島のナショナリズムの問題とどう絡み合っていくのか／いかないのか、を考察することは、じつは報告者の現在の最大の関心事とわいていい。だが、この「文芸文化」および当時の三島に関わるナショナリズムの検討については、本報告の主旨とはやや異なるので、今度の課題として別の機会に譲ろうと思う。

さて、以上に述べてきたような経緯もあり、相原和邦氏が「『文芸文化』時代の三島には、やはり『文芸文化』ないしその背後にあった日本浪漫派の影が明らかに認められる。」⁹とまとめているように、「文芸文化」に投稿していた頃の三島の初期作品、すなわち、16歳から19歳ごろにかけての戦中の三島作品は、基本的に、「文芸文化」という日本浪漫派の文芸思潮の影響下にあったことが、これまでの三島文学研究における固定した理解である。

一方、近年になって杉山欣也氏は、こうした定説化の姿勢自体に留保をもとめ、初期三島作品の可能性を狭めないためにも、三島の初期＝「文芸文化」という強固な定義をできるだけ相対的にとらえるよう提案している¹⁰が、本報告の主旨も、ここにあるとわいていい。

三島は、戦後まもなくの1946（昭和21）年の川端康成宛書簡¹¹のなかで、次のように述べる。「戦争中、私の洗礼ハプティスマであつた文芸文化一派の所謂『国学』から、

どんなにじたばたして逃げ出したか、今も私はありありと思ひ返すことができます。文芸文化終刊号にのせた奇矯な小説「夜の車」は国学への訣別の書でしたが、それを書いたときは胸のつかへが下りたやうでございました。」ここで三島は、「檜扇」の代わりに、実際に1944（昭和19）年の「文芸文化」終刊号に掲載することになった小説「夜の車」が、「文芸文化」一派からの訣別の意を込めた作品であったことを明かしている。また、決定版全集の中心的な編集人・田中美代子氏が、別の書簡から、当時の三島の「文芸文化」における「仲間内での確執」を析出している¹²。これらからは、どうやら「夜の車」が描かれた1944年頃までには、三島が、「文芸文化」一派からの脱出願望を内に秘めていたと推察できる。くりかえせば、「夜の車」は、当初予定されていた「檜扇」にかわって、「文芸文化」終刊号に掲載された小説である。したがって、結論じみたことを先回りして述べれば、「夜の車」が完成する直前の作品である「檜扇」にも、「文芸文化」との訣別の意味が込められていた可能性が高いと考えられる。

では、ここで、「檜扇」を封印にいたらしめた「夜の車」に関する従来の定説を確認しておきたい。

短編小説「夜の車」は、のちに単行本収録の際、「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」というじつに長々しいタイトルに改題される作品である。あらずじは、本報告にはあまり関係がないので割愛するが、ごく掻い摘んでいえば、室町時代の「殺人者」が、将軍や乞食や能若衆などを次々と殺害し、それぞれの殺人を自らの人生哲学とともに日記に記していく、というものである。

「夜の車」について、三島自身はのちに、「後年の私の幾多の長編小説の主題の萌芽が、ことごとく含まれてみると云つても過言ではない。」¹³と解説しているが、こうした自作解説もあいまって、戦後の〈三島由紀夫文学〉のありようを決定づけた作品として、現在では定説化されている¹⁴。また一方で、とりわけ殺伐とした日本の中世を題材とした点において、「文芸文化」終刊号に掲載されながらも、「文芸文化」的作風とは一線を画す小説として位置づけられている¹⁵。つまり、「夜の車」は、「文芸文化」すなわち戦中の初期三島文学との訣別であると同時に、戦後の〈三島文学〉へとつながる明確な転換点を示す作品とされているわけだ。そして、「文芸文化」終刊号において、戦後の〈三島文学〉への転換点だとされる「夜の車」がせり上がった代わりに、「檜扇」が封印されたとするならば、この「檜扇」には、そうした「夜の車」という明確な転換点にいたるまでの重要なプロセスが書き込まれているはずであ

る。そして、そのプロセスとしての「檜扇」には、おそらくは、すでに「文芸文化」との訣別が含意されていたといえることができる。

これは次のようなことが傍証となるだろう。まず、田村景子氏の指摘¹⁶にあるように、「文芸文化」時代の若き三島は、自作を掲載してもらわんがために、「文芸文化」の古典崇拜の気風に迎合していたむきがある。たとえば、「文芸文化」掲載の三島作品はすべて日本を舞台とした古典賛美の内容を含んでいたが、それに対して、当時ほかの雑誌に掲載された作品では、外国を舞台としたり、古典讃美以外の内容をもたせたりしていた。くわえて、「檜扇」執筆開始の前夜にあたる1943（昭和18）年3月の東文彦宛書簡¹⁷によれば、三島は当時、「西洋」に惹かれる気持ちを芸術家の自然な姿勢として肯定しており、留保をおきながらも、戦時体制に応じて「日本への回帰」のみを称揚しはじめた当時の日本浪漫派（おそらくは「文芸文化」一派も念頭においているはず）に対して、批判的な眼差しを向けていたことがわかる。こうした文脈のなかで、「文芸文化」とは毛色の異なる、西欧を舞台とした「ホフマン張りの怪奇小説」¹⁸、「檜扇」が、「文芸文化」終刊号への掲載のために描かれたわけである。ここに、16歳の時からそこにいたるまで迎合しつづけてきた「文芸文化」の気風に対する離反のにおいを嗅ぎとることは容易だろう。やはり、この「檜扇」に、すでに「文芸文化」との訣別が含意されていた可能性は非常に高い。

このように、「夜の車」よりも前に書かれた「檜扇」に、すでに「文芸文化」との訣別が書き込まれているとすれば、その背景にはどのような経緯が考えられるだろうか。この問いには、次の小埜裕二氏の考察が重要なヒントを与えてくれるように思う。小埜氏は、「物語的作風から「夜の車」のような散文詩的作風に転換した経緯には、やはり現実の影が、言い換えれば死の影が徐々に三島に差しいついていたと考えなければならぬまい。」¹⁹と述べ、「夜の車」における作風の転換を、当時19歳の三島に迫っていた徴兵命令の問題と関連づけている。これは重要な視点だと考える。なぜなら、じつは、「檜扇」執筆と徴兵命令との関わりを捉えなおすことによって、「檜扇」における「文芸文化」との訣別の含意がより明白なものとなり、かつ、初期の三島における自己表現の模索の様子を、改めて「檜扇」に透かし見ることができるようになるからである。

3. 逼迫する戦時体制と作家としての自己表現

後年三島は、18歳のときを回想して、「どうせ兵隊にとられて、近いうちに死んでしまう」、あるいは、「何

とか兵役を免れないものかと空想する」など、徴兵に関する妄念に囚われていたことを語っている²⁰。こうした徴兵と三島文学との関わりについては、これまでに多くの指摘があるが、三島文学研究の第一人者・松本徹氏による次のような言がその公約数となるだろう。「昭和十八年も春頃から不吉な様相を急速に強めるのだ。／それとともに兵役に就かなければならない年限が近づいて来た。(中略)当然、級友たちは戦況に敏感になったし、実際に死の覚悟も口にするようになっていたようである。(中略)多分、このこと(引用者注・深刻化する戦時体制)が三島の早熟さを加速させたのである。(中略)三島は、戦火に追い立てられ、迫りくる破壊と競争するようにして、ただひたすら純粋に自らの望むまま、書きつづけたのだ。」²¹。しつこいようだが、ここで松本氏が述べる昭和18年とは、「檜扇」が書かれた1943年のことである。これに関連して田中美代子氏は、本報告の最初にも紹介した「昭和十八年十二月卅一日午後十一時五十九分」という「檜扇」の原稿用紙に見られる記入から、「次第に情勢の悪化が伝えられる戦時下」で、「大晦日をまたいで元日へと書き続け」、「零れてゆく巨大な命の砂時計と競争している」姿を、「檜扇」執筆中の三島に読みとっている²²。

では、「檜扇」執筆当時の三島が置かれていた状況を時系列順においながら明確化してみよう。Handoutに掲載した年表(※本報告文では末尾に掲載)は、1943年から1944年にかけての「檜扇」執筆、そして、当時まだ学習院高等科の学生であった三島に関わる徴兵制(学徒出陣)の問題、くわえて、初めての単行本『花ざかりの森』刊行の動向、という三つのトピックにしぼって簡単に年表化したものである。ちなみに、徴兵に関する事項については、左に★印をつけ、なかでも重要なものだけはゴシック体になっている。また、「檜扇」に関わる部分は網掛けにしている。以下、年表をあわせてご覧いただきたい。

まず、年表最初の1943(昭和18)年9月ごろだが、当時18歳の三島は、東や清水に宛てた書簡からわかるように、処女創作集『花ざかりの森』刊行がいよいよ決まり、心を浮き立たせていた。だが喜びも束の間、10月2日、「在学徴集延期臨時特例」(勅令第755号)が発せられ、それまで学生に認められていた徴兵猶予がなくなり、たとえ学生であっても、理科学や医学系および大学院生といった一部の学生以外は、満20歳で徴兵されることになった。こうした大幅な学生の徴兵・出兵を学徒出陣というが、このとき、18歳だった三島は、あと一年半もすれば、学徒出陣に駆り出されることになったのである。そして、網掛けをした12

月18日、「檜扇」を起筆する。さらに、その六日後の12月24日、今度は「徴兵適齢臨時特例」(勅令第939号)が発せられ、徴兵適齢が満20歳から満19歳に引き下げられる。1月14日が誕生日である三島にとって、翌年にはすぐに徴兵命令をうける境遇に突然立たされたわけであるから、その驚愕のほどは計り知れない。それを示すかのように、二日後の12月26日、三島は、『花ざかりの森』の刊行を任せている富士正晴に宛てて、入隊が早まりそうなので、その刊行を来年6、7月頃までにしてほしいと頼む。また同書簡では、どこか新作への自信を漂わせながら、さきに引用した「ホフマン張りの怪奇小説」という表現をつかって「檜扇」の執筆状況を伝えている。その四日後の12月30日には、これもすでに引用した、清水文雄宛書簡において、怪奇・幻想小説「檜扇」を、そぐわぬことを危ぶみながらも「文芸文化」に掲載予定だという意味を伝える。その後、夜を徹して、大晦日から新年にかけて「檜扇」を執筆し、1944(昭和19)年1月5日にひとまず完成させ、14日に、いよいよ徴兵適齢である満19歳を迎えることになる。その後、3月22日の清水宛書簡では、新たに書けない場合は、やはり修正してでも、「檜扇」を「文芸文化」終刊号に掲載したいという要望を伝える。また、年表には4月24日の出来事として、『花ざかりの森』刊行の正式許可が政府からおりたことを記載したが、つまり、年表最初の1943年9月からここにいたるまで、三島は、一人前の作家デビューを意味する処女小説集が刊行されるか否か、やきもきさせられていたことがわかる。こうして、徴兵検査をへて、1944(昭和19)年8月、結局「文芸文化」終刊号には、「檜扇」ではなく「夜の子」が掲載されるということになる。

以上が当時三島のおかれていた状況である。ここから映し出されるのは、1943(昭和18)年末から1944(昭和19)年はじめにかけて、処女短編集『花ざかりの森』の刊行決定によって萌芽したはずの、一人前の作家としての矜持や開拓心、および、年明けからの徴兵が想定される逼迫した戦況下での、もう二度と小説を書けなくなるかもしれないという恐怖や焦燥、そういった二重性を帯びた思いに突き動かされていた18歳の作家の姿である。こうした作家としての自尊心や、恐怖にも等しい焦燥感が、当時の三島をして内奥から湧き上がる独自の自己表現の模索へと向かわせたことは想像にかたくない。だとすれば、「夜の子」よりも以前に、すでに「檜扇」において、それまで支配的であった「文芸文化」の作風との訣別が欲され、かつ、戦後の〈三島文学〉へとつながる独自の自己表現の模索

がはじめられていた、と考えることは、やはり不自然ではない。本報告の問題提起において、「文芸文化」にそぐわぬ「檜扇」を、強いてその終刊号に掲載しようとする作家の願望の所在を問うたが、おそらく、その答えは、「夜の手車」よりも先に、この「檜扇」にこそ、「文芸文化」との訣別の意思が込められていたところにあると、ひとまずは言えそうである。

では、「檜扇」における自己表現の模索がどのようになされたか、について、今度はもう少し作品に近づいて、そのプレテクストを視座として検討みたい。

4. 幻想・怪奇小説としての「檜扇」——プレテクストから眺める

さきの富士宛書簡にあったように、三島によれば、「檜扇」はホフマンを意識してかかれた作品である。そこで、まずはホフマンに対する三島の眼差しから、「檜扇」の創作意図を抽出してみることにする。

通称 E.T.A.ホフマンは、18 世紀後半から 19 世紀前半のドイツの小説家である。近代幻想小説の祖とされ、幽霊・悪魔・自動人形・心靈科学・ドッペルゲンガーなどを主なモチーフとして、幻想世界と現実社会とを巧みに重層させた怪奇的世界を数多く描いた。日本では 19 世紀後半から多く翻訳されていたが、三島の蔵書目録にホフマン作品はなく、また管見によれば、ホフマン作品²³に「檜扇」と内容が一致するものはないため（雰囲気に類似性を湛えたものはあるが）、今のところ、当時の三島が具体的にだれの翻訳によって、どの作品を意識することになったかは判然としない。とはいえ、三島は後年、ホフマンに関するいくつかの言及を残す。次に挙げるのは、数多くの幻想小説を残した近代日本作家・泉鏡花についての解説である。「言葉と幽霊とを同じやうに心から信じたこの作家（引用者注・泉鏡花）は、もつとも醇乎たるロマンティックとして、E.T.A.ホフマンの墨を摩するものである。」²⁴つまり、幽霊を描いた鏡花の幻想小説は、ホフマンと同様に言葉の力によって確固としたロマンスを表現している、と述べている。これと同様のことは、作家の澁澤龍彦や石川淳との対談においても語られている。

さらに別の場所では、作家の内田百閒とホフマンとの比較に言及しながら、次のような言及がみられる。「常識で考へて、お化けや幽霊は、そこに現実の素材として存在するものではない。従つてお化けや幽霊を扱ふ作家は、現実の素材やまして思想や社会問題によりかかつて作品を書くわけではない。」そして、「内田百閒が信ずべき素材は言葉だけである」と断じつつ、百閒と鏡花とともに、言葉の力を信じた作家として褒

めあげる²⁵。つまり三島は、幽霊などの超自然現象を描いた、ホフマンおよび鏡花や百閒の幻想小説について、「思想や社会問題によりかか」ることのない、純粹な言葉の力の結実を捉え、高く評価していたのだ。だとするならば、男爵という幽霊（亡霊）をあつかった怪奇・幻想小説「檜扇」は、三島にとって、いかなる思想や社会問題にも寄り添うことのない、作家自身の言葉の力を追求しようとした作品だとみなせるのではなからうか。

ところで、三島は、「模倣性の強い私は、(中略)いい小説を読むとすぐ真似てみたくなって、いろいろと猿真似を演じた」と過去の創作活動を振り返っている²⁶。たしかに三島は、十代から晩年にいたるまで、マルセル・ブルースト、レイモン・ラディゲ、トオマス・マンなど各国の西欧文学や、古代から近代にかけての様々なジャンルの日本文学、他にもギリシャ神話や古今東西の宗教・哲学書など、「模倣」を駆使した小説を数多く創作しつづけたといっている。ここでは、三島が「模倣」に自覚的・意識的であったか否かに問わず、内容や表現上、「檜扇」のプレテクストとみなせそうな二つの作品を取りあげてみたいと考える。

一つは、詩人・小説家の佐藤春夫による短編小説「女誠扇綺譚」²⁷である。「檜扇」執筆の前年にあたる 1942（昭和 17）年、三島は、この短編小説を近代文学の傑作の一つとして挙げている。²⁸また、「女誠扇綺譚」は、主人公「私」と、その台湾人である友人とが、二人で台湾の奇妙な無人屋敷に入りこみ、そこで幽霊とおぼしき女の声聞き、扇を拾うという幻想性を伴った物語である。詳細は割愛するが、作品の冒頭あたりに漂う怪奇なムードや、主人公「私」が連れの外の人とともに冒険心から無人屋敷に入り込むという物語内容（「檜扇」では、主人公「私」が連れの外蘭西人心霊学者とともに男爵の無人屋敷に忍び込み、檜扇を手に入れる。）、加えて、幽霊と扇といったモチーフに、「檜扇」との類縁性がみとめられる。

さらに、二つめの作品は、詩人・萩原朔太郎による短篇小説「猫町」²⁹である。これも時間の都合上、詳しくは触れられないが、『猫町』の結末部にある、中国の哲学者・荘子の有名な一節「胡蝶の夢」からの引用、そして、あらゆる人から嘲笑されようと主人公「私」が幻想世界の実在をかたくなに信じるという物語内容は、それぞれ、「檜扇」のエピグラフである「胡蝶の夢」の漢文引用、そして、たとえ友人から笑われようと主人公「私」が幻想体験を事実だと信じて疑わないという結末部の内容と共通している。じつは、「檜扇」執筆の 1943（昭和 18）年、三島は様々な書簡のなかで、当

時刊行された『萩原朔太郎全集』に夢中であることを、事あるごとに書いているのだが、とりわけ 1943 年 3 月の東宛書簡³⁰では、朔太郎の「猫町」を読んで感服したことが印象深く語られている。

ひるがえって、佐藤春夫、萩原朔太郎とともに、雑誌「日本浪漫派」の同人の詩人たちである。言い換えれば、古典の賞讃にだけ重きをおこうとする「国学」的な「文芸文化」一派とは、やや毛色の異なる志向をもった日本浪漫派の作家たちである。「文芸文化」との訣別をはかる当時の三島において、言葉の力にたよった自己表現の模索の先が、このように日本浪漫派の作家への接近だとするなら、従来、三島の「文芸文化」との訣別が、日本浪漫派との訣別と同義だとされてきたことに、異議を唱えることができるだろう。つまり、あくまで、当時の「文芸文化」との訣別とは、その「国学」的作風からの脱出にすぎず、むしろそうした訣別を目指す自己表現の模索においては、日本浪漫派に見習おうとする側面があった可能性が浮上するのである。

ところで、ケヴィン・マイケル・ドーク氏は、初期日本浪漫派について次のように分析する。ドーク氏によれば、「日本浪漫派にとっての「日本への回帰」は、近代との断絶を図るうえでの不可欠な一要素」でこそあれ、そうした「日本への回帰」は、あくまですでに成立してしまったものとしての「近代世界というコンテクストの中で意識的に」なされたものであり、「日本的伝統の人工的な性格を強調」する特質をもっていた³¹。つまり、本来、初期日本浪漫派の「日本への回帰」は、本質主義的なナショナリズムとは異なり、あくまで、構築主義的な指向性をもった、人工的なロマンティズムの表現にすぎなかったと言い換えることができる。

一方、1946（昭和 21）年 3 月の川端康成宛書簡³²の記述を挙げてみたい。これは、さきに挙げた書簡と同一のものであり、「文芸文化終刊号にのせた奇矯な小説「夜の車」は国学への訣別の書でした」という告白のつぎの文章である。「夜の車」で試みられた独自の自己表現についての説明が熱弁されている。「私は国学（引用者注・「文芸文化」の国学）をロマンティズムの運動として了解してゐました（中略）しかし次第に彼らガリアリズムを排斥しつつ、ますます自ら貧しくなつてゆくのを悲しく思ひました。かうした国学の危機に当つて、私はメカニズムの問題を提示しようとしてゐました。それは一種の人工主義の類唐派芸術と密接に関聯するものなのです（中略）内面的衝動を一瞬一瞬の形態に凝縮せしめて、時間と空間の制約の外で、人工的に再構成しようとするのです。」

ここで三島は、「夜の車」の執筆当時、「文芸文化」特有の「国学」的表現が次第に貧しくなったことを嘆き、そうした「文芸文化」とは異なる方向性として、「内面的衝動」を「時間と空間の制約の外で、人工的に再構成しようとする」手法を小説に用いたことを熱っぽく説明している。ところで、これは、さきにドーク氏が分析していた初期日本浪漫派の特徴、すなわち、「あくまで人工的なものである」という自覚のもとに「日本的伝統」を再構築しようとするロマンティズムの手法、と極めて近い側面をもっているようにみえる。ただし、上記のような「人工主義」的手法が採用された、「殺人者」の殺人哲学が綴られていく「夜の車」においては、三島の「人工的」な自己表現の主な対象が、日本浪漫派や「文芸文化」一派が主題とした「日本的伝統」ではなく、作家の「内面的衝動」へとシフトしているといつていい。たしかに、「夜の車」は日本の中世を舞台にし、その時代性に見合った殺伐とした風情を巧みに取り入れてはいるが、そうした道具立ては明らかに脇であり、したがって伝統的な日本美の構築よりも、殺人哲学のほうが主題化されているのはい目瞭然だ。一方、「夜の車」の前段階にあたる「檜扇」では、「日本的伝統」（「檜扇」の幻想の都市空間には、古典的な王朝時代から鹿鳴館時代かけての〈日本的伝統〉が、幻想と檜扇のモチーフを絡ませながら、周到に仕込まれている。）と「内面的衝動」（「檜扇」に一貫して漂う〈死〉と〈再生〉のイメージ／欲望）とが、ひどくバランスの悪い恰好で入り組んでおり、三島の自己表現の焦点が未だどっちつかずの印象をうける。ひとまず作品の善し悪しはおくとして、言い換えれば、積極的に「日本的伝統」を再構築し、讃美し、主題化しようとする日本浪漫派（および「文芸文化」）の気配は、「夜の車」に比べれば、いまだ「檜扇」に多く漂っているといつていい。ただし、「檜扇」には、主人公「私」や仏蘭西人心霊学者にみられる滑稽なムード、そして、あまりに荒唐無稽なアナクロニズムの交錯などが散見されることから、むしろ初期日本浪漫派の手法を用いながらも、それをパロディ化して、それとの批評的な距離をとっている可能性が十分考えられる。だが今回は、時間の都合上、残念ながら作品内部の詳細な分析までにはいたれなかった。今後、慎重に研究を掘り下げていきたいと考える。

おわりに

最後に、ここまでの報告をまとめ、今後の課題を示す。

三島由紀夫の初期の未発表短編小説「檜扇」は、戦

後の〈三島文学〉への転換点とされる「夜の車」が、1944年の「文芸文化」終刊号に掲載されると同時に、封印されることになった作品である。したがって、「檜扇」には、その明確な転換にいたるプロセスが書き込まれている。「檜扇」執筆の1943年末から1944年にかけて、三島がおかれた状況を改めておってみるとき、そこには、一人の小説家としての自尊心や開拓精神、および、徴兵命令というデッドラインを目前にした恐怖や焦燥感が入り交じる、18歳の作家三島の姿を見つけることができる。そうした心境にあって、三島は、この西欧を舞台とした幻想小説「檜扇」において、それまで支配的であった「文芸文化」の作風から離れ、自らが紡ぎ出す言葉の力のみ信じた独自の自己表現の模索をしていたと考えられる。つまり、これまでの定説とはことなり、「夜の車」執筆以前に、三島における「文芸文化」との訣別は始まっていたのだ。また、従来、三島における「文芸文化」との訣別は、日本浪漫派との訣別と同義であるとされてきたが、「檜扇」のプレテキストからは、むしろその訣別にいたる自己表現の模索において、日本浪漫派に接近する側面があったのではないかと推察できた。

今後は、①日本浪漫派および「文芸文化」をさらに詳しく調査することで、初期三島文学との関連性を分析し、三島の自己表現のみならず、当時の三島の公的ナショナリズムとの距離のとり方について考察を深め、②その考察をもとに、「檜扇」の詳細なテキスト分析を試み、「夜の車」への〈プロセス〉を析出し、③そうした「檜扇」をはじめとする初期作品群の研究の成果から、戦中のみならず、これまで論じられてきた戦後の〈三島文学〉を改めて脱／再構築することを課題としたい。

注

1. 佐藤秀明「三島由紀夫の未発表作品 — 新出資料の意味するもの」（『国文学解釈と教材の研究』2000年9月）p.107
2. 田中美代子「黄金郷にて — 未発表作品解説」（『新潮』2000年11月）p.82
3. 杉山欣也「三島由紀夫初期未発表小説における〈貴族階級〉 — 「心のかがゞやき」「公園前」「鳥瞰図」の一側面 —」（『京都語文』2006年11月）p.109
4. 清水文雄宛書簡（1943年12月30日・封書）決全38巻、pp.585-586。「新潮」（2003年2月）に初掲載。
5. 清水文雄宛書簡（1944年3月22日・葉書）決全補巻、p.216。2005年12月刊行の全集補巻に初掲載。
6. 三島由紀夫「私の遍歴時代」（『東京新聞』1963年1月10日）決全32巻、p.271
7. 参考・『日本現代文学大事典 人名・事項篇』（明治書院、1994年6月）、『増補改訂 新潮日本文学辞典』（新潮社、1988年1月）
8. 参考・高田瑞徳「『文芸文化』との出会いと初期作品」（『国文学解釈と鑑賞』1968年8月）、小高根二郎「三島由紀夫と『文芸文化』」、岡保生「『文芸文化』の“みやび”の美学」（『国文学解釈と鑑賞』1971年11月）、杉山欣也「文芸文化」（『三島由紀夫事典』松本徹・佐藤秀明・井上隆史編、勉誠出版、2000年11月）
9. 相原和邦「三島文学と『文芸文化』」（『文学研究』1971年6月）
10. 杉山欣也「文芸文化」（注8・前掲書）pp.587-588
11. 川端康成宛書簡（1946年3月3日・封書）決全38巻、p.244
12. 田中美代子『三島由紀夫 神の影法師』（新潮社、2006年10月）p.31
13. 三島由紀夫「解説」（『花ざかりの森・憂国』新潮文庫、1968年9月）決全35巻、p.173
14. 高田瑞徳「『文芸文化』との出会いと初期作品」（『国文学解釈と鑑賞』1968年8月）、小埜裕二「『夜の車』論」（『金沢大学文学部論集 文学科篇』1991年2月）、越次俱子「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」（『別冊国文学三島由紀夫必携』学燈社、1983年5月）など。
15. 神西清「ナルシシズムの運命」（『文学界』1952年3月）、相原和邦「三島文学と『文芸文化』」（『文学研究』1971年6月）など。
16. 田村景子「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」試論 — 狂乱する女性たちからツァラトゥストラへ — 人・花・月を摘む」（『繡』2004年3月）p.27
17. 東文彦宛書簡（1943年3月24日・封書）決全38巻、p.152
18. 富士正晴宛書簡（1943年12月26日・封書）決全38巻 pp.852-853
19. 小埜裕二「三島由紀夫のニーチェ受容 — 「夜の車」と『ツァラトゥストラ』」（『金沢大学国語国文』1991年2月）p.44
20. 三島由紀夫「十八歳と三十四歳の肖像画 — 文学自伝」（『群像』1959年5月）決全31巻、pp.223-224
21. 松本徹「戦争、そして占領下で」（『三島由紀夫論集 I 三島由紀夫の時代』佐藤秀明・井上隆史・松本徹、勉誠出版、2000年3月）pp.15-17
22. 田中美代子「黄金郷にて — 未発表作品解説」（注2・前掲論文）p.82
23. 『ホフマン全集』全10巻、深田甫訳（創土社、1971年9月〜。第10巻未刊）
24. 三島由紀夫「解説」（『日本の文学 4 尾崎紅葉・泉鏡花』中央公論社、1969年1月）決全35巻、p.330
25. 三島由紀夫「解説」（『日本の文学 34 内田百閒・牧野信一・稲垣足穂』中央公論社、1970年6月）決全36巻、p.165
26. 三島由紀夫「十八歳と三十四歳の肖像画—文学自伝」（『群像』1959年5月）決全31巻、p.223
27. 佐藤春夫「女誠扇綺譚」（『女性』1925年5月、『定本佐藤春夫全集』第5巻[臨川書店、1998年6月]所収）
28. 三島由紀夫「本のことなど 主に中等科の学生へ」（1942年9月28日摺筆か？未発表資料）決全26巻、p.339
29. 萩原朔太郎「猫町」（『猫町』判書荘刊、1935年11月。『萩原朔太郎全集』第5巻[筑摩書房、1976年1月]所収）

30. 東文彦宛書簡 (1943年3月17日・封書) 決全38巻、p.150
 31. ケヴィン・マイケル・ドーク『日本浪漫派とナショナリズム』小林直子訳 (柏書房、1999年4月。原著1994年) p.21, p.41
 32. 川端康成宛書簡 (注11・前掲書簡) 決全38巻、p.244-245

※引用は体裁上、一部表記を改めている。ルビは適宜省略している。／は改行をあらわす。
 ※三島由紀夫の著作の引用は、すべて『決定版三島由紀夫全集』全42巻 (新潮社、2000～2005年) に拠った。本報告では「決全」と略記した。
 ※本報告では詳細な資料を記した Handout を使用したが、煩雑さを避けるために割愛した。

たけうち かよ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本文学専攻

【参考年表】「檜扇」執筆・『花ざかりの森』刊行・学徒出陣について

徴兵	西暦(元号)年月日	満年齢	「檜扇」執筆・『花ざかりの森』刊行・学徒出陣にかかわる動向
	1943(昭18)年9月4日	18歳	東文彦宛書簡 (処女創作集の出版の件)
			この頃、富士正晴の奔走で、『花ざかりの森』出版の話がまとまる。ただし、刊行は早くとも一年後だと富士から言われる。
	1943(昭18)年9月5日	18歳	清水文雄宛葉書 (『花ざかりの森』の刊行が決まったこと)
★	1943(昭18)年10月2日	18歳	在学徴集延期臨時特例 (勅令第755号) →※すべての文系学生の徴集猶予がなくなる。
★	1943(昭18)年10月21日	18歳	神宮外苑競技場で、出陣学徒の壮行会開催。
★	1943(昭18)年12月18日	18歳	「檜扇」起筆。
★	1943(昭18)年12月24日	18歳	徴兵適齢臨時特例(勅令第939号)→※徴兵適齢が満20歳から満19歳に変更。
	1943(昭18)年12月26日	18歳	富士正晴宛封書 (入隊が早まりそうなので、『花ざかりの森』刊行は翌年6、7月頃までを希望。怪奇小説「檜扇」の執筆状況。)
	1943(昭18)年12月30日	18歳	清水文雄宛封書 (怪奇・幻想小説「檜扇」の執筆状況と、それが「文芸文化」にそぐわないかもしれないこと。『花ざかりの森』刊行のこと。)
	1943(昭18)年12月31日	18歳	「檜扇」執筆。原稿48枚目に「昭和十八年十二月卅一日午後十一時五十九分」と記す。
	1944(昭19)年1月5日	18歳	午後5時、「檜扇」擱筆。
★	1944(昭19)年1月14日	19歳	三島、満19歳を迎える。
	1944(昭19)年3月22日	19歳	清水文雄宛葉書 (「文芸文化」終刊号への寄稿承諾のこと、新たに書けない場合は、やはり「檜扇」に手を入れ、出したいことなど。)
	1944(昭19)年4月24日	19歳	『花ざかりの森』刊行の正式許可が下りる。
★	1944(昭19)年4月27日	19歳	この日付の徴兵検査通達書を受け取る。
★	1944(昭19)年5月	19歳	本籍地 (兵庫県印南郡志方村) で徴兵検査を受け、第2乙種に合格。
	1944(昭19)年8月	19歳	「夜の車」を「文芸文化」(7巻4号・終刊号) に掲載。
	1944(昭19)年9月9日	19歳	学習院高等科を首席卒業。学業短縮措置により、9月の卒業となる。

参考：佐藤秀明・井上隆史「年譜」(決全42巻、pp.83-84)